

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：14601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20001

研究課題名(和文)コーパス構築による『赤い鳥』の語彙に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Basic Study on the Vocabulary of 'Akai Tori' Through Corpus Development

研究代表者

山田 実樹(YAMADA, Miki)

奈良教育大学・国語教育講座・講師

研究者番号：00909038

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1)『赤い鳥』の言語的特徴を実証的に明らかにすること、2)他の近代語資料との対照から、『赤い鳥』の言語資料としての位置づけを明らかにすることを目的として、『赤い鳥』の童話作品における語種調査と、語種調査のための童話作品電子化作業を行った。語種調査においては1)鈴木三重吉作品では、後ろの巻ほど和語が減少、漢語が増加している。2)和語の使用率は他作家の方が高い。3)外来語は使用数は多くないが、衣食住に関する語が多く、表記も揺れている。ことを明らかにした。電子化作業では、166作品を電子データ化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの近代語研究において、児童を読者とする書き言葉資料に関する言語学的な研究は、国定教科書の語彙調査以外では手薄である。本研究で調査対象とした『赤い鳥』も、綴り方指導に関する資料として国語教育の分野では多くの研究がなされているが、日本語学的調査はなされていなかった。この刊行時期と受容者という点で重要な近代語資料について、語種調査を通して言語的特徴を明らかにし、その資料性について述べた点に本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to empirically clarify 1) the linguistic characteristics of 'Akai Tori' and 2) its position as a linguistic resource in comparison with other modern language materials. To achieve this, we conducted a survey of the types of vocabulary used in the fairy tales of 'Akai Tori' and digitized these fairy tales for vocabulary analysis. The vocabulary survey revealed the following: 1) In the works of Miekichi Suzuki, the use of native Japanese words decreases and the use of Sino-Japanese words increases in later volumes; 2) The usage rate of native Japanese words is higher in the works of authors other than Miekichi Suzuki; 3) Although the number of loanwords is not large, many of them relate to clothing, food, and housing, and their notation varies. During the digitization process, 166 works were converted into digital data.

研究分野：日本語学

キーワード：語種 赤い鳥 コーパス

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

代表者が調査を続けている鈴木三重吉主催の子ども向け雑誌『赤い鳥』は、国定教科書が刊行されてから14年後の大正7/1918年に創刊された。その受容期は標準語が定着しつつある時期であり、その読者は国定教科書の読者と重なっている。『赤い鳥』は、日本語にとって標準語形成という大きな変化があった時期の一側面を映し出す資料である。教育現場を中心に広く受容され、ある種の規範として子供達の学習材となった。『赤い鳥』の近代語資料としての重要性は、以下の3点が挙げられる。

- ・子どもを読者層とすること
- ・国定教科書とは異なる教材として、国から独立して制定されたこと
- ・18年間の長期に渡って刊行されたこと

近代語研究において、児童を読者とする書き言葉資料に関する言語学的な研究は、国定教科書の語彙調査はなされているが、明治から昭和にかけて数多く刊行された子供向け雑誌に関してはまだ手薄である。『赤い鳥』も、綴り方指導に関する資料として国語教育の分野では多くの研究がなされているが、日本語学的調査はなされていない。

さらに、『赤い鳥』は個々の作家・作品、または雑誌全体の語彙、文法、文体について調査・考察をなす資料である。雑誌が刊行されていた18年間は、当時の雑誌の刊行期間としては長期に渡っており、この間の語彙、文法、文体の変化を捉えることも可能である。

この研究背景を受けて、本研究では『赤い鳥』の言語的特徴を明らかにすることを通して、近代語、あるいは児童文学の言語的特徴を明らかにし、『赤い鳥』の言語資料としての位置づけについて考察しようとした。

2. 研究の目的

本研究は(1)『赤い鳥』の言語的特徴を実証的に明らかにすること、(2)他の近代語資料との対照から、『赤い鳥』の言語資料としての位置づけを明らかにすることを目的としている。

本研究の独自性は、綴り方教育でのみ取り上げられてきた児童雑誌『赤い鳥』を資料とし、実証的研究を通して、その資料性を考察することにある。このことは、標準語制定によって変化した当時の日本語の言語変化の分析により、作家たちが無意識的に子どもに植え付けようとしていたステレオタイプの言語使用・役割語について明らかにすることでもある。

また、現在国立国語研究所を中心に近代語の資料のコーパス化が進められているが、児童雑誌は対象となっていない。『赤い鳥』の童話作品における電子化を進めることで、対照資料としての活用が進み、近代語の多面的な特徴が明らかになる。

3. 研究の方法

(1) 『赤い鳥』における語種調査

『赤い鳥』の言語的特徴を実証的に明らかにするために、語種調査を実施した。先行研究から、『赤い鳥』刊行時、語彙の変化が大きかったこと、外来語が大幅に増加したこと、明治に漢語が急激に増加したが、その後少しずつ和語が増加し、漢語が減少していくことが指摘されている。これらの調査は、いずれも和英辞典や新聞、雑誌を資料として行われており、子ども向けの文学作品における調査はみられない。『赤い鳥』の童話作品を対象に調査することによって、当時の語彙変化が子ども向け文学作品にも反映されているのか、子ども向け文学作品独特の語彙使用があるかを明らかにすることができる。

(2) 語種調査のための童話作品電子化

語種調査には、『赤い鳥』における計量的語彙調査が必要である。その際、1つ1つ用例を拾っていく方法は現実的ではなく、調査対象作品を電子化し検索可能なコーパスを作成する。

語種調査に向けては、すでに『赤い鳥』の鈴木三重吉童話作品60話を電子化した実績があり、この手法を応用して、他作家の作品についても電子化を進めた。作成した電子データには国立国語研究所が公開する「日本語歴史コーパス」と同様の形態素解析を施し、将来的に日本語歴史コーパスの1つとして公開することを目指す。これにより、他の通時的・共時的言語研究への活用が容易になるだけでなく、児童文学研究や綴り方研究といった『赤い鳥』における他分野の研究に貢献することもできる。

4. 研究成果

本研究では、以下のことを明らかにした。

(1) 『赤い鳥』における語種調査

『赤い鳥』1～10巻の童話作品を対象とし、Web 茶まめを利用して形態素解析を施し、語種調査を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

鈴木三重吉作品では、後ろの巻ほど和語が減少、漢語が増加している。

和語の使用率は他作家の方が高い。

外来語は使用数は多くないが、衣食住に関する語が多く、表記も揺れている。

この結果は、『赤い鳥』が児童雑誌であることや童話作品を調査対象としていることが影響している可能性がある。現段階では調査対象が限られているため、さらにデータを増やし調査をする必要がある。

(2) 語種調査のための童話作品電子化

『赤い鳥』のコーパス構築に向け、童話作品の電子データ化作業を行った。本研究を通して、『赤い鳥』のコーパス構築のための基礎データ(作品の電子データ)として351作品中166作品について電子データ化が完了しており、おおよそ全体の1/2の量を実施することができた。全数を電子データ化できなかった理由としては、『赤い鳥』の複雑な誌面構成が要因となりOCRが上手く機能しなかったことが挙げられる。

電子データ化し、校正済みの作品は、国立国語研究所によって公開されている形態素解析ツール「茶まめ」を使用して、順次形態素解析を行っており、解析結果に問題のある場合には、手作業で修正している。

その他、本研究を通して『赤い鳥』の言語資料としての位置づけについて考察し、これまでの調査を通して明らかになった『赤い鳥』の近代語資料としての価値についてまとめた。具体的には、第三期以降の国定教科書と刊行期を同じくしていること、鈴木三重吉が「子供たちの手本」となるようにという創刊の理念に従って、言語選定意識を持って作品に手を入れていたと思われること、「子供のための芸術」を志向したことが大人たちに受け入れられ、教育現場を中心に子供たちの学習材として受容されたこと等から注目すべき近代語資料であることを述べた。また、紙面上において特徴的な表記がなされていたり、現代共通語とは異なるオノマトペが使用されていたりすることなどを挙げ、『赤い鳥』がこの雑誌によって元々存在した言葉に関する様々な価値観や規範意識が強化された可能性について指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山田実樹	4. 巻 47
2. 論文標題 近代語資料としての『赤い鳥』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 奈良教育大学 国文 研究と教育	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田実樹
2. 発表標題 近代語資料としての『赤い鳥』
3. 学会等名 奈良教育大学国文学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山田実樹
2. 発表標題 『赤い鳥』第1期1～10巻における語彙の特徴 鈴木三重吉を中心に
3. 学会等名 第397回日本近代語研究会(2022年度秋季発表大会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田実樹
2. 発表標題 『赤い鳥』の資料性 教科書との関わりという観点から
3. 学会等名 第8回日本人間教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------